

トルコから研修生

それぞれの震災体験を交流

八月十日、トルコからムレディン・コクサルさん（イスタンブール市）、ユスフ・オズデミルさん（ブルザ市）、アイゼ・オズクン・エルバツさん（イズミル市）の研修生が長田区を訪問された。



三名はトルコの行政職員で復興事業に活躍されている。

トルコは九九年八月十七日、十一月十二日と立て続けに大地震があり、その規模も阪神大震災を上回るもので、現在大変な状況下で復興が行われている。

三名の研修生はトルコ政府の要請により神戸市に派遣され八月から十一月の期間、防災対策やまちづくりについて研修を受けている。今回、当区を選んだのは被災地の復興状況や震災時の対応を実地に学ぼうとのことだ。

木下区長から長田のまちの成り立ちや震災時、震災後のまちの状況等について説明され、続いて震災資料室のメンバーから写真やパネル等を用いて長田の街の被災時の状況や住民の避難状況、さらに震災後の区役所の対応について説明を行った。

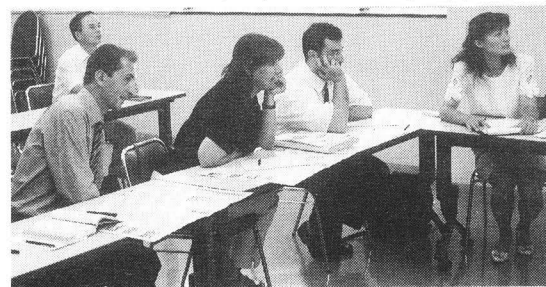
参考
トルコ国地震災害復興支援神戸市チーム活動報告書（1999年8月27日～9月）



トルコの地震では一つの町だけでなく大都市が震災を受け、国も人々もどうしていいかわからない状況だったということ、日本で例えると京都・大阪・神戸が同時に被害に会うようなものだ。

また意見交流では、トルコの地震では火災はなかったが家屋の下敷きになった方の救出が間に合わないうちに余震により命が絶たれたといった話、トルコでも学校が避難所となっていたが、住民が学校の安全性に不安を感じ学校に避難せずにテントで話などトルコと長田の状況の違いが明らかになった。

トルコの復興もこれからが大変だと予想され、初めての課題と向き合うようになるが長田での研修が少しでも役立てば嬉しく思う。一日も早い復興を心より祈念したい。



人・街・ながた

震災資料室だより

人・街・ながた

震災資料室

発行

〒653 神戸市長田区北町3-4-13
電話(078)579-2311発行人／寿 広文
編集人 武川・福島・山西

第45号

もくじ

- 1 スープの味は南北統一
- 2 寄贈書籍紹介
- 3 長楽小学校の記録
- 4 トルコから研修生

スープの味は南北統一

元祖・平壤冷麺屋

長田の街の中央を流れる新湊川の桜橋の西三丁の角に元祖・平壤冷麺が移ってきて一年余りになる。

長田郵便局の東向いにある本店は震災復興区画整理地区にあり事業が動き出している。六間道に店を出してから六十年が経ち、店長も三代目になろうとしている。

元祖・平壤冷麺屋の味は、何と言っても「麺」と「スープ」にある。その特徴を奥さんの朴順子さん（六十才）は、「粉は自家製ブランド、もちろん手打ちで注文を聞いてから作り『シコシコ麺』と言われ腰が強いこと。スープは水キムチが発酵する寸前のを調合したあっさり味で、アルカリ性で美容と健康にいい」とのことだ。

冷麺と一緒に出てくるのが麺湯で香ばしい味でおかわりをしたくなる。今、若者に人気があるのはピビン麺（八百円）。



来客用駐車場には大阪や姫路ナンバーの車が目に止まり、人気の高いのが分る。ご主人の張元範さん（六十三才）の故郷は平壤で、奥さんは釜山出身だ。

南北首脳会談の劇的な両金氏の出会い、全世界が固唾を呑んで見守っている中で行われた——金正日総書記は健康そうであるが、年上の金大中大統領に対する礼儀と一歩さがった謙譲さは、もはや南北は後戻りしない。決意の表明と映った。

二人が平壤国際空港で抱き合う姿がテレビに映し出された時、朴順子さんは「嬉しさがこみあげてきて涙が出て、思わず息子と拍手をした」のだった。夫婦で統一列車に乗る日が近づいてきた。



寄贈書籍紹介

混沌からの出発

—SVA阪神・淡路大震災救援活動の歩み—

この度、社団法人「シヤンティ国際ボランティア会（旧称：曹洞宗国際ボランティア会）・地球市民事業課長の市川 斉氏」から『混沌からの出発』という書籍を頂戴しました。

震災当時、市川氏たちは、神戸に事務所を設置し、被災地の救援・支援活動に取り組んでこられました。この本は、自然災害が続けざま起こっている現在、震災体験の教訓が、今後ますます必要になってくるかもしれないという思いから刊行することになったそうです。

この本の中に「これだけは伝えたい10の視点」というページがあります。ここでそれを紹介したいと思います。

- ① 鍵を握るのはボランティア・コーディネイトである
- ② 救援物資を第二の災害にしてはならない
- ③ 被災者とボランティアには心の溝がある

- ④ 地域性を理解して行動する
- ⑤ ボランティアにも心のケアは必要である

- ⑥ 地元の人々や団体と連携する

- ⑦ 活動を始める際には、撤退の時期を念頭に置く

- ⑧ 行政だけに頼らず市民相互の協力の輪を

- ⑨ 想像力を働かせて行動しよう

- ⑩ 救援活動は自らの実情に即した方法でこれらの中で②の物資に関するところに物資を受け取る側の方のお願いがありました。それは、次の三つです。

- ① 一つの箱には同じ物を入れ、できれば同じサイズのダンボールを使って送る。

- ② 統一書式の「物品リスト」を作り、箱の見やすいところに添付する。

- ③ 個人で送らず、団体（グループ）でまとめて送る。

以外に気が付かないところかもしれませんが、物資を分配する側からすればみんなが気をつけてくれれば作業もはかどり非常に助かると思われます。

今後、どこかに物資を送る時はこの点に気を付けて送ってくださいね。

阪神大震災 2000年の記録

発行 阪神大震災を記録しつづける会

『体験記を募集し、出版し続けるとともに、ボランティア活動を記録することも大切だ』と思う。それはまた、私たちの会の重要な使命でもある。』

今回の体験記募集には八十二編の手記が寄せられた。手記を継続して投稿して下さる方、「地震から6年目で、ようやく書く気になった」と、心の封印を解かれた方もいらっしゃるそうだ。また、トルコ・台湾の大地震の報告記、地震以来、継続してボランティア活動をされている方々から、支援する側の思いや経験の寄稿もある。

『複数の視点からみることで、はじめて震災の検証ができるのではないか。そして検証の結果は個人の立場や考え方の癖によって違う。腹藏なく検証結果を語り合い、できれば、一部を共感し合える場のひとつになれば』と会の立場がある。

この本のお問合せは左記まで

社団法人・シヤンティ国際ボランティア協会

(SVA) 広報課

TEL 03-5360-1233

Fax 03-5360-1220

長楽小学校の記録

今月8日に行われた静岡県浜名郡新居町小中学校防災教育研修会の資料を紹介する。この資料は、長楽小学校の加納靖久先生が作られたものだ。震災当日からの毎日の記録、避難所としての体制、学校の再開、生徒の心のケアなどが記されている。

ここでは、長楽小学校の教育再開と給食の開始をとりあげてみる。

1月21日——学校に子供たちを集め、1時間、作文とゲームをした。（県下教職員組合員が泊まりこみ支援）

2月9日——校庭に子供たちを集合させ、避難所になっていない千歳小学校まで通い、応急教育開始。授業は2時間、給食はなし。

*千歳小学校は周囲が全焼し、一旦逃げ込んだ被災者も他校へ避難したため、無人だった。全教室は避難所になっていた長楽・蓮池小学校が利用した。子供たちは、廃墟のなかを15分教員に引率されて通学し

た。

2月27日——千歳小学校での授業を3、4時間に延長し、給食を再開した。断水、ガス途絶のため、給食はパン、牛乳、ゼリーで開始した。

4月1日——自校で教育、給食再開。（ガス復旧は3月上旬。）

*校内避難者代表と協議し、教室を一部融通してもらった。避難所となっていた校内には、まだ1000人ほど居住のままで、教室不足のため、市民花壇の場所にプレハブの仮設教室を建て、授業を行う。

5月中旬——震災前の機械警備体制（総合警備）に戻り、教職員の宿泊を廃止。

*震災後、警備会社からガードマンが集まらず、学校の夜間警備を引き受けるところがなかった。そのため、教職員や区・市からの職員派遣が続いた。

9月1日——229日に及ぶ避難所を解消し、本格的な学校復旧が始まった。

ここまでこぎつけるために様々な困難を乗り越えてきたことは言うまでもないだろう。

出演団体

震災5周年 鎮魂と再生のメッセージ
神戸和太鼓フェスティバル

9/3（日）12時30分開場

新神戸オリエンタル劇場

・長田の宮神撫太鼓研究会

・なかよし太鼓 ほか

お問い合わせは神戸和太鼓センター
(078-241-1770)

7月24日

中央小学校にて

震災資料室展

